キョウブンニュース

第2号
2020/10/16
和教組障害児学校部発行

「マスクをしていると何を話しているのかわからない。」「マスクは表情がわからないので不安な気持ちになるよ。」「口の形が見えないと、何を言っているのか理解できないです。」「声がこもっていて聞き取りにくい。」

いつもは明るく元気な、ろう学校の児童生徒たちが、顔を曇らせて教師に相談に来ます。どうすれば解決できるのか、教師は子どもに問いかけます。

「マスクをしている人に何といえばいいんだろうね？」

すると子どもはうつむいて、

「マスクを外してとは言いづらくて…。」

確かに、そうですよね。自分のためにコロナ感染のリスクを冒して「口を見せてください。」と言うことは、大人でも言いにくいことです。

聞こえづらい人の多くがコミュニケーションする上で、手話だけではなく、表情や唇の動き等を頼りにしています。マスクを付けたままでも、「これから話しますよ。」という何らかの合図（「肩をたたく」「手を振る」など）があると、話の聞き取りに集中できる時もあります。しかし、マスクをしていると口の動きが抑制され声の高音域の音がカットされ、聞き取りにくい声になっているの↗↘です。

どうすれば子どもたちの不安をなくし、安心・安全な授業ができるのかを考え、透明マスクを考案しました。それを実際に使用しながら、何パターンも作成し、教員や子どもたちの意見を取り入れて、写真のような透明マスクの形になりました。

この透明マスクを着用して授業や会議を行うことで、「表情がわかるから、安心できる。」「声が聞きとりやすい。」「口の形が見えているから、話の内容が分かりやすい。」「布マスクや不織布のマスクよりも呼吸が楽。」と、いつもの明るいろう学校が戻ってきています。

「マスクをすると普段より声が届きにくい状況になっていることを知って、意識する。」「明瞭な発話をする。伝わりにくくなっているので、合図を大きくしよう。」「板書を増やしてみよう。」「話をする時には、注目させよう。」このような手立てがたくさんの学校で広がって欲しいです。また、学校だけではなく、社会のいろいろな場所で、必要とされているのではないでしょうか。

みなさんも、透明マスクを作ってみませんか。作り方は、和歌山ろう学校のホームページ（トピックス）をご覧ください！　【ろう分会・山路哲弘、岡紀久子】

けん玉とコマがブームになっている学年があります。その中でいわゆる重度グループのA君も毎日練習していて、私の顔を見ると、〝やってるよ！〟とアピール。不器用な彼にとっては、なかなか難しいだろう、と心の中で思っていましたが、こつこつと取り組む彼の姿からは、〝できる自分になりたい！〟という彼の願いが伝わってきました。

そして、ついに先日、彼がタイミングよくコマを回せたところに居合わすことができました！ところが、その次の巻き方が気になった私が、つい声をかけたら、案の定失敗となりました…。

彼の姿をとおして、まずは子どもが興味関心を持てるものを準備すること、そして、子ども自身が試行錯誤し「わかった」「できる」と実感できることが何より大切で、教師はその学びを支え、深められるよう一人ひとりに合った指導ができなければいけないことを改めて痛感しました。

以前はけん玉をブンブン大振りしていたA君が、今日は持ち手の裏皿に玉をのせることができていました！そしてもう一人、毎日けん玉を握り続けてきたBさんも、気づけば「もしもしかめよ♪」とリズミカルに玉を弾ませるようになっています。自分が「やりたい！」と思ったことは、誰に言われなくてもがんばれるものですね。二人とも、お見事！【きのかわ分会・児島弘子】

▼最近、ついに観葉植物に手を出してしまいました。毎日少しずつ大きくなる植物がだんだんかわいく思えてきて、思わず独り言をつぶやきながら手入れをすることも…。つくづく「育つ」姿をみることが好きなんだなぁと思う次第です。（編）